

中国雲南省植物紀行

—1989. 5～7—



光田 重幸

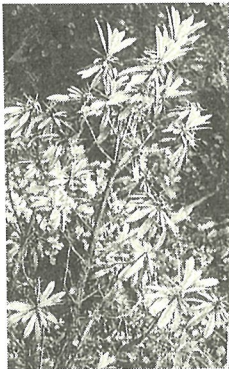
照葉樹林帯に咲くシャクナゲ

緑深い森の縁へに咲く緋紅色の花が、ジープの窓から見えた。私はすぐに「停車」を命じ、同行のカメラマンに注意をうながした。これまでに何種類もシャクナゲの花を写して来たカメラマンは、はじめは私の興奮ぶりが解せないらしく、しばらくげんな顔をしていたが、「これがあの、照葉樹林帯に咲くシャクナゲです」という私の解説を聞いて、カメラマン特有の冷静な顔つきにもどった。

中国雲南省の外国人立入り禁止区域で、文化人類学と生物学、地質学の調査をすることが決まったのは、一九八八年の夏頃だった。しかし、中国側との交渉は、政治的・経済的および学術上の先取権の問題が複雑にからんで、私たちはいつ出発できるというあてもなかった。そんな状況下で、ともかく五月からの調査の強行に賭けたのは、経済的な問題を含めていろいろな理由があったが、シャクナゲの花の季節が過ぎてしまふ、ということも、そのひとつだった。雲南省は、植物の王国、花の王国として

有名である。その中でもシャクナゲは、日本のの十倍を超す二百数十種が知られている。しかも、ただ種類数が多いだけではない。その中には、樹高十センチ程度という小型種から、ときには樹高二十五メートルに達するギガンテウム種という世界最大のシャクナゲがある。もうひとつ興味深いのは、シャクナゲは高山植物的で、夏の栽培管理がたいへん、という私たちの常識に反して、そこには高温多雨の樹林に生育する種類が含まれている。

シャクナゲの品種改良を大規模にこころみしたのは、イギリス人が最初である。彼らはヒマラヤ域や雲南省から多数の種子を持ち帰り、第二次世界大戦ころまでに、すぐれた園芸品種を続々と作りだした。この園芸品種は、「セイヨウシャクナゲ」として、



照葉樹林帯に咲くシャクナゲ

やがて世界中に広まっていったのだが、イギリスはロンドンで夏の平均気温が十六度前後と涼しく、セイウシヤクナゲがこの気候に合うように改良されたのは、いわば当然といえよう。大阪や京都のように、夏の平均気温が二七度前後にも達する場所では、その栽培が難しいのも、やむを得ない。だから、日本の植物園や家庭で、シヤクナゲの大樹が、ほったらかしで見事な花を一面に咲かせるなどということは、よほど条件の良い場所以外では、およそ考えられないことなのだ。だが、もしも、イギリス人が捨ててしまった、高温多雨条件下（照葉樹林帯）でよく育つ雲南のシヤクナゲの原種を日本に導入することができたら？高さ十メートルを超える大樹に、ピンクや緋紅色の大花が群がり咲く光景を想像すると、胸のすくような気がするではないか。――

―このようなことを、私は出発に先だつてひらかれた集会で述べたのだった。この私の提言は、日本のいくつかの植物園の知るどころとなり、導入のあかつきにはぜひうちの植物園に、というひきあいも来た。

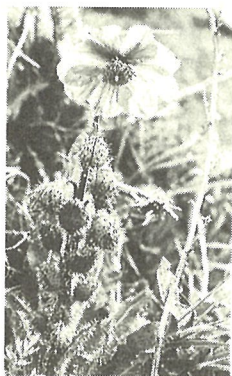
だが、禍福はあざなえる縄とはよく言っ

たものである。正式調印を見ないまま中国に乗りこんだ私たちは、その熱意と隊長の努力によって、中国側との調印に成功したが、科学調査をとりしきる中国科学技術委員会は、日本側の強行突破に反発し、標本を含めて生物の国外持ち出しに同意しなかった。あのカメラマンが冷静な顔をしたのは、多分に職業柄のせいだろうが、私はそのシヤクナゲの花を目の前にして、いささか無念を覚えざるを得なかった。いつの日か、私か別の人が、私の試みを実現してくれるのを祈るばかりだった。

青いケシ

最近かなり広く知られるようになった「青いケシ」は、ケシ科メコノプシス属に属している。もつとも、メコノプシス属の植物のすべてが青い花を咲かせるわけではなく、雲南省に十七種あるメコノプシス属のうち、青系統の花を咲かせるのは十一種ほどで、他は、赤、黄、白およびその中間色である。

なぜ、これほど青いケシが騒がれるのだろうか。



青いケシ・メコノプシス・ホリデュラ

その花の、清楚で気品に満ちた美しさは、実物を高原の大気の中で（それも、朝霧の中とか、高山特有の紫色を帯びた空のもとで）見ていただくしかないが、青という色は私たちに、何かこの世ならぬ気をおこさせるものであるようだ（あのゲーテは、「色彩論」の中で、青は私達から遠ざかってゆく色、という表現をつかっている）。

しかし、青いケシがもてはやされる理由は、ほかにもある。

植物の花色というものは不思議なもので、あるグループにはまったく、または稀にしかあらわれない色というものがある。

これは、学問的には、色素合成能力の系統的欠除という素つ気ない言い方で片づけられてしまうが、育種家にとっては、その不可能に何とか挑戦してみたい、と思わせる

事実でもある。

かくして、鮮赤色のコスモス（まだ完全には成功していない）、黄色い椿（原種で黄花のものが、十年ほど前に見つかった）やアサガオ（まったくくない）、青い菊やケシを求めて、植物学者や育種家の探求が続くことになる。反対に、もうこれ以上の花色はいらないと思わせるほど変化が豊かなのは、まずパンジーくらい（緑はまだないが）で、ほとんどすべての一般的な園芸植物では、新しい花色を求めて、育種家の努力が

つづけられているといつてもよいだろう。ケシも同様だった。もともとケシ類は冷涼な気候に向いているものが多く、ヨーロッパでの栽培に適していたので、イギリスを中心に品種改良がすすめられていた。青いケシをはじめて発見（もちろん、現地の人を除いて）したのは、イギリス人のペイレイ（一八八二—一九六七）で、一九一三年、チベットにおいてだった。植物学者でなかったペイレイは、その花が青いケシであつて、めずらしい花色であることには気づいたが、日記にはただ、まだ見たことのない青いケシと、紫のアイリス、プリムラ

があつた、と書いただけだった。しかし、当時の探検家の恒例として、彼はその植物の標本を作成し、イギリスに送つた。彼が採集したメコノプシスには何種類もあつたが、その中のひとつは、ペイレイを記念してメコノプシス・ペイレイの学名がつけられた。いまではペイレイは、探検家というよりは「青いケシ」の発見者として有名になつてしまつたが、その背景には当時全盛期だった大英帝国の園芸文化があつたことを抜きにしては考えられない。

私たちは、とうぜん青いケシに興味をもつてしたが、花の時期にはやや早すぎるように思つていたので、あまり期待はしていなかった。雲南省の西北端、チベットまであと少しという徳欽についたとき、いまから六十年ほど前にイギリス人の植物探検家キングドン・ウオードがこの地で見つけて、「岩蔭に青い銅の鉱物が出ていると思つた」というメコノプシスの群生を、一度はみてもたいという気をそらされた。しかし、捜しても捜しても、ごく小さな苗が見つかるばかりで、高山病の危険もあり、ついにはきらめてしまつた。

徳欽の町を発つて、雲南省の主都昆明に向けて帰りはじめた日の朝、先行のテレビチームの車から、無線で連絡がはいつた。「先生、ちょっと来て下さい」というのだ。私は、道ばたに群生しているサクラソウの解説でもさせられるのだろうかと思つたが、車で駆けつけてみると、道ばたの赤土の何でもない斜面に見られない青い花が咲いている。それも、ただ一輪、蕾はたくさんあつたが、ただ一輪が、たつた今咲いたみずみずしい花弁を、朝露をあびて広げきつたところだったのだ。とつさのことで、私はほとんど声もでなかつた。朝光を透かしたその花弁は、やや濃いめのブルー・トパーズといった冷たい冴えがあり、刺のはえたむくつけき莖葉と、みごとな対照を見せていた。

この話には、後日談がある。そこから三時間ほど山をくだつた道ばたで、総計五十本ほどの青いケシの群生を私たちが見つけた。花はどの株も満開であり、草丈は一メートルを超すみごとな大株も多かつたが、すでにあたりは午後の光が満ちあふれ、花弁は水気を失つて、しわがめだつた。同じ

種類であるにもかかわらず、それには誰も感動しなかった。時と場所を選ばなければ、美しさもひきたたない好例である。

牧場の花たち

ヒマラヤや雲南の花の紹介では、かならず牧場（放牧地を含む）の花の光景がでてくる。サクラソウや低木性のシヤクナゲが咲き乱れるその光景に、だれしも感嘆するのだが、私の知るかぎり、それ以上に踏み込んで解説した本がない。じつは、タネを明かせば、これは自然の風景ではない。シヤクナゲやサクラソウ、アネモネ、ナデシ



牧場の有毒植物サクラソウ

コ類はすべて有毒であるか家畜の嫌う物質を含んでいて、家畜は食べるのを避ける。毒のない草や低木は食べられてしまうから、その空地にこれらの有毒植物が広がっているのである。いわば、これは、家畜の飼育という生活文化の反映であり、意識的にはないが、人工的に作りだされた間接的な人間の文化なのである。

もつとも、いくつかの植物は、地面にへばりつくように生育して、家畜の食害を避けるという、巧妙な手段を講じている。また、おそろしい刺で武装して、身の安全をはかっているものもある。しかし、いざれ



ボール状に育つナデシコ科
ノミノツヅリ属植物

にせよ、牧場には、これらの植物しか残らないのが普通である。
あの美しいお花畑に、毒や植物側の策略が満ちみちていることを知り、知的な喜びにひたることができるのは、ひよっとしたら生物学者にだけ許された特権なのかもしれない。
(工学工学部専任講師)



葉を地面にへばりつけて食害を避けるノウゼンカズラ科のインカルピレア